



特集：沿線エリアの魅力創造

〔南海電鉄にみるブランド・プロモーションと成長戦略〕

沿線エリアに誘客する 地域の魅力づくり

増加するインバウンドに対応する施策を講じるとともに、

南海電鉄では沿線エリアに観光客を誘致する

さまざまな取り組みを精力的に展開している。

地元の自治体や住民とともに、沿線の観光資源・地域資源を見直し、掘り起こしながらその魅力を発信する。

具体的なコンテンツはもちろんだが、そうした地域との協働が、

沿線の活性化や価値の向上に確実につながっている。

「めでたいでんしゃ」で注目を集める加太線を中心に、世界遺産・高野山にアクセスする高野線ほか、各エリアでの取り組みを紹介する。

文●茶木 環／撮影●織本知之
写真提供／南海電気鉄道株式会社



特集：沿線エリアの魅力創造

【南海電鉄にみるブランド・プロモーションと成長戦略】

加太さかな線プロジェクト

和歌山市中心部にある和歌山市駅から紀ノ川を渡って西へ向かい、20分余り。終点の加太駅では、オリジナルの前掛けを着用した駅勤務者が乗降客を出迎えてくれる。列車はすべて本線の和歌山市駅に乗り入れているが、加太線は紀ノ川駅を起点としており、営業キロは9・6km。明治45年に加太軽便鉄道として開業した路線で、現在もほぼ全線が単線の旅心が誘われるようなローカル線だ。

平成26年11月、南海電鉄は加太観光協会・磯の浦観光協会と協働で加太線の愛称を冠とした「加太さかな線プロジェクト」を開始した。加太線沿線の魅力を発信するプロジェクトで、第1弾のキャンペーンでは、地元・和歌山工業高等学校の生徒たちが制作した観光駅看板の掲出、加太駅勤務者によるオリジナル前掛けの着用のほか、地元名物を増やし周知していこうと、地元飲食店と共同開発した新名物料理、名産品の販売も行った。

「当社沿線も、都市部以外の地域では人口減少や超高齢化が進んで輸送人員が減少し、その対策が課題となっている。どの路線から着手していくのか検討する中で加太線に着眼したのは、沿線から都市部へ通勤・通学のニーズがあり、かつ沿線には加太という観光地、磯の浦という関西屈指のサーフィンのメッカがあり、観光路線の要素も

大きい。地元は魅力を高め、当社は地域内外のお客さまを運ぶということ、さらに協力体制を強固にして、ともに沿線を盛り上げていくことになった。いい関係を築いて活動できている」と南海電鉄鉄道営業本部運輸部営業課の石坂勝利主任はその経緯を説明する。

女性ターゲットの「めでたいでんしゃ」

数々の取り組みがなされ、プロジェクトの効果が少しずつ浸透、形となっていく中で、平成28年4月に運行を開始した観光列車「めでたいでんしゃ」は加太線の存在を一気に広めた。

車両は「加太の鯛」と「淡嶋神社の縁結び」をイメージした「めでたい」「愛でたい」意味を込めて製作された。ピンクと赤を基調とした外観と内装で、木の素材でできたさかな型のつり革や鯛の模様が散りばめられた座席シートには、各車両に一つずつ「ハートのつり革」、鯛模様には「ハートのうろこ」が隠されているなど、遊び心のある楽しい列車だ。

「シンプルでインパクトのある観光列車にしよう」と一年半かけて企画した。乗客のイメージは女性で、車内の装飾やつり革など、女性社員のアイデアや意見をどんどん採用した。鉄道ファン以外にも乗ってもらいやすい、かわいい電車ができた」（石坂主任）
評判は上々で、加太線の利用者はめ

でたいでんしゃの運行開始以来、大きく伸びている。平成28年度の定期外利用者は17万9000人と、前年度の14万9000人から3万人も増加した。

また、予想外の大きな効果もあった。20〜40歳代の

女性観光客をターゲットに考えた電車だったが、実際に運行を開始すると親子連れで賑わうようになったのだ。沿線外から人を呼び込むだけではなく、沿線住民に愛される電車となり、さらには自分たちが暮らす地域の魅力を再発見する契機ともなって、沿線が一体となった活性化への取り組みに弾みがついた。

「同じ和歌山市内の観光列車では、和歌山電鐵のたま電車が人気で、台湾や香港から観光客を集めている。当社のインバウンド事業部が海外でPRして香港の雑誌などに取り上げられたこともあって、最近では、訪日外国人の方々も乗りにきてくださるようになった」と石坂主任は、海外にも広がるその存在感について語る。

めでたいでんしゃは、観光客が利用しやすいよう、土休日は固定ダイヤで運行する。ダイヤが定まっていらない平日の運行については同社の専用サイトで確認することができる。随時企画するキャンペーンにより温泉施設や飲食店などを利用する際の特典が提供されたり、単発ではあるが、車内で地元産



南海電気鉄道株式会社
鉄道営業本部 運輸部 営業課 主任

石坂勝利

Katsutoshi ISHISAKA

の食材を使った名物料理を楽しむグルメツアーも行われ、人気を呼んでいる。また、平成28年11月には、和歌山市のオリジナル婚姻届「わかやましめでたいとどけ」にめでたいでんしゃが採用された。公式書類に特徴あるめでたいでんしゃの絵柄が印刷されている。それだけ加太線とめでたいでんしゃの存在が地元に着した証しだろう。

自助と共助でまちをつくる加太

ところでこうした鉄道事業者のプロジェクトは地元、特に観光地にとって飛躍の好機でもある。南海電鉄との取り組みについて地元はどのように受け止めているのか、加太のケースを見てみたい。

紀淡海峡に面して美しい海岸線が続く加太は歴史ある景勝地で万葉集にも詠まれている。当時は大和を出発点とする南海道の終着点、また淡路島や四国方面への出発点で、交通の要衝として栄えた。毎年3月3日、全国から奉納された内裏雛を白木の小舟に乗せて



女性の乗客が多い明るく落ち着いた雰囲気の中。つり革もさかな型



全国にある淡嶋神社の総本山。加太淡嶋神社とも



前掛け着用で乗降客を出迎える。写真左のポスターはシリーズで作成、駅勤務者、地元住民などがモデルとなった



食事処「オジバキッチン」。観光客向けの店も登場

海に流す神事「雛流し」で知られる淡嶋神社は、全国に1000社ある淡嶋神社の総本山。徳川ゆかりの神社として知られているが、時代を遡れば『日本書紀』にも登場する。加太からフェリーで約20分の友ヶ島は紀淡海峡に浮かぶ無人群島で、旧陸軍の要塞跡やさまざまな生物が生息する自然の宝庫として人気が高い。

また、寒流と暖流が交わる紀淡海峡は水質が良く、指で糸をたらず江戸時代からの伝統漁法で獲る鯛をはじめ魚のおいしさでも知られている。

「長らく海上交通の要衝でもあった加太は、渡海できない時の風待ちの港であり、その宿場として大々的にはないものの歴史を重ね、地元の漁師たちも訪問客と交流していた。それが現在の加太のまちにつながっている」と加太観光協会の利光伸彦会長は語り、「昭和33年に加太町は市町村合併により和歌山市に編入されたが、それまでの一時期、加太町民が株主となって加太観光株式会社を発足し、友ヶ島を所有していたこともある」と住民の地元に対する愛着を説明する。

しかし、少子高齢化が進む現在、「和歌山市のような中核市でも、加太のように郊外になると住民、特に高齢者が都心部での行政サービスをうまく活用できないことがある。小学校には、1クラス9人しか児童がいない。

高齢者や子どもたちが暮らしやすいまち、住民が地元で活動できるようなまちを、自分たちの力でつくる必要となっている」（利光会長）

平成22年、和歌山市加太地区連合自治会、加太観光協会、加太漁業協同組合は「加太地域活性化協議会」を発足させ、続いて平成27年には「加太まちづくり株式会社」を設立した。同社は、地域循環型経営モデルとして「わかやま地域活性化ファンド」も投資している。

「補助金に頼るだけではなく、原資をつくれる地域の資源を育て、その活動に住民が参加することでまちが潤う仕組みをつくるのが目的で、行政の方々にもアドバイザーや協力をお願いする。加太地域活性化協議会とこの加太まちづくり株式会社を両輪に、資源を活用した観光振興や特産物の販売事業などを進め、加太のまちを活性化していきたい」と利光会長は自助と共助のまちづくりの志を語る。

そのためにも地域の資源を活用した観光施策は重要であり、観光客がまちなかを歩くためのマップ制作などにも



加太観光協会 会長
利光伸彦
Nobuhiko RIKO

特集：沿線エリアの魅力創造

【南海電鉄にみるブランド・プロモーションと成長戦略】



「網がレールを泳いでいるようだ」と人気上昇中の「めでたいでんしゃ」

力を入れている。

歴史と文化と足がある観光地

そうした中、加太さかな線プロジェクトが始動したわけだが、利光会長は「加太は、自分たちでまちづくりに取り組み、さまざまな活動を積み重ねてきたからこそ南海電鉄は連携を考えてくださったのだと思う。民間企業なので、地元からやってくれというだけでは動いてはもらえなかっただろう」と受け止めている。そして、地元サイドの意識として、「加太線で多くの方に足を運んでいただいて、地元は『よく来てくれた』と声をかけ、迎えられるような環境にしたい。加太の住民のうち、観光や漁業に携わっているのは半分以下で、和歌山市の中心部に通勤する住民も多い。ここで自分たちだけで静かに暮らしたいという人々もいるが、それではまちの将来はない。外の人々を迎える意識を高めていく必要がある」と語る。

実際にまちなかには、住民によって古民家を改造したおしゃれなカフェや店舗がではじめ、観光客が足を止める光景を見かけた。訪日外国人観光客を対象にした漁業体験や民泊など、可能性はまだ大きいと考えている。

「マイカーで行ける観光施設が増え、どこもかしこも観光地になっていったが、本来の観光地は誰もが利用できる公共交通があつて歴史がある場所だと

思う。加太は、食に恵まれ温泉があり、気候も申し分のない伝統ある観光地にもかかわらず、後発の観光地の勢いに負けている。けれども、公共交通を使つて誰でも来られる観光地には、蘇る力がある。『加太さかな線プロジェクト』を好機として、地元・加太の魅力を伝えていきたい」（利光会長）

手応えが大きい加太さかな線プロジェクトについて、石坂主任も「沿線に溶け込む努力をもっと重ねて、地元の知恵もお借りして、さらに盛り上げていきたい。現在は加太や磯の浦が中心となっているが、他地域の観光資源も発掘して、最終的には加太線全線を活性化させていきたい」と意欲を語っている。

都市機能が集積する和歌山市駅

一方、加太線が乗り入れ、JRとも接続する和歌山市駅では平成29年3月、南海和歌山市駅ビルが竣工した。これは和歌山市・和歌山県と連携して進める和歌山市駅活性化計画において、南海電鉄が実施する第1期計画の先陣を切って開業するオフィスビルで、都市機能の集積を担う。地上7階建て、延べ床面積約6200㎡のビルには、金融機関やメーカー、通信関係などの企業のほか、総務省統計局も入居する。

また第1期計画では、駅施設を新たにし、改札を2階から1階部に移設す



和歌山市駅活性化計画の全体パース。平成 32 年の全体竣工を目指す



上／真田幸村ゆかりの九度山駅、下／赤備え甲冑をモチーフにした「南海・真田赤備え列車」



訪日外国人が増え続けている高野山



高野山への特別な旅の舞台装置「天空」。ワンビュー座席で車窓が楽しめる



平成 27 年 2 月にリニューアルした高野山駅



世界遺産推進 PR 担当課長「ハニワ課長」

高野山への特別な旅の舞台装置「天空」。ワンビュー座席で車窓が楽しめる。その道中も、駅の環境や景観が整備されている。九度山が戦国武将・真田

「こうや花鉄道」は高野線の橋本駅から高野山駅間の愛称で、高野線の 10 駅とケーブルカーの高野山駅がある。この「こうや花鉄道」のシンボルとして平成 21 年から運行されているのが観光列車「天空」だ。車両コンセプトは「俗世間から、精神世界へ Change of mode」。山岳区間の風景になじむ深いグリーンの外観、絶景を楽しめる座席やコンパートメント、展望デッキなど観光客の旅気分を一層盛り上げる。

駅前広場と改札口を同一平面にし、利便性の向上と交通結節の強化を図る計画だ。駅施設は平成 29 年 7 月に供用開始となる。

続く第 2 期計画では、南海和歌山ビルを解体し、ホテル棟（カンデオホテルズ 122 室）・商業棟・公益施設棟（和歌山市民図書館など）・駐車場棟の建設を予定しており、全体の竣工は平成 32 年を目指している。再開発をリードし、活気ある新しい和歌山市駅の顔づくりに取り組んでいる。

こうや花鉄道プロジェクト

高野線では「こうや花鉄道プロジェクト」が平成 19 年より推進されている。世界遺産である高野山への道中をさらに魅力的にすることを目的として、南海電鉄と地域が一体となつてさまざまな取り組みを行っている。

「こうや花鉄道」は高野線の橋本駅から高野山駅間の愛称で、高野線の 10 駅とケーブルカーの高野山駅がある。この「こうや花鉄道」のシンボルとして平成 21 年から運行されているのが観光列車「天空」だ。車両コンセプトは「俗世間から、精神世界へ Change of mode」。山岳区間の風景になじむ深いグリーンの外観、絶景を楽しめる座席やコンパートメント、展望デッキなど観光客の旅気分を一層盛り上げる。

その道中も、駅の環境や景観が整備されている。九度山が戦国武将・真田

幸村ゆかりの地であることを伝える、真田十勇士のイラストがデザインされた「九度山真田花壇」（九度山駅）、「花屏風」（高野下駅・下古沢駅）や線路脇の「季節の花スポット」など、植栽の日常的な手入れは南海電鉄社員と地元ボランティアが協働で行っている。

また、竜王溪と極楽橋の森林整備プロジェクトでは、九度山町役場や高野町役場などで構成するそれぞれの実行委員会に南海電鉄も参画し、世界遺産・高野山にふさわしい景観を守るため、ボランティアとともに植樹や間伐などを行っている。そのほかにも古いレールなどを展示している高野下駅ホームの「南海思い出ミュージアム」、中古沢橋梁展望デッキなど、地域や鉄道の魅力を伝える取り組みが各所で行われている。

和歌山キャンペーンを台北で開催

九度山は高野山へと続く参詣道「高野山町石道」のスタート地点でもあり、九度山駅には多くの人が降り立つ。この九度山を盛り上げるため、高野線では平成 27 年 11 月より「南海・真田赤備え列車」を運行している。九度山で 14 年間過ごした真田幸村が身に着けたという赤備え甲冑をモチーフに、「六文銭」や「結び雁金」を取り入れたデザインが施されている。また、九度山駅舎も「真田赤備え」「六文銭」の暖簾や陣幕を掲出している。

特集：沿線エリアの魅力創造

【南海電鉄にみるブランド・プロモーションと成長戦略】



観光列車「天空」は「こうや花鉄道プロジェクト」のシンボルとなっている

当初は、NHK大河ドラマ（真田丸）の放映に合わせ1年間の運行予定だったが、利用客の評判が高く、沿線住民の希望も大きかったことから、運行延長が決まった。

さらに、台湾の「桃園メトロ」の開業に合わせ、今年3月には台北駅で、九度山町、大河ドラマ「真田丸」・戦国わかやま誘客キャンペーン推進協議会と「真田・和歌山観光キャンペーン」を開催。現地のTV局で同ドラマが放送されていたことから、真田・赤備えブースを設置してPRし、和歌山への誘客を図った。

世界遺産を目指す百舌鳥・古市古墳群

ところで高野線の沿線には、堺市・羽曳野市・藤井寺市の3市にまたがって巨大な「百舌鳥・古市古墳群」が存在している。4世紀後半から6世紀前半にかけてのもので、89基が現存する。墳丘長が200m超の古墳は全国に40基近くあるが、そのうち11基は百舌鳥・古市古墳群にあり、中でも最も大きな仁徳天皇陵古墳（全長486m）は国内1位を誇る。

百舌鳥・古市古墳群は世界遺産登録を目指しており、これまでに3回、国内推薦の対象候補となった実績がある。南海電鉄も堺市のキャラクター「ハニワ課長」を自社の百舌鳥・古市古墳群世界遺産推進PR担当課長に任命するなど、登録への機運を高めている。

耕作放棄地を活用した農業体験施設

最後に、これまで紹介した事例とは一味異なる南海電鉄の取り組みを紹介したい。

沿線の農村地域で増加している耕作放棄地の有効活用と人が集まる場所づくりを目指し、今年4月、南海本線・羽倉崎駅付近（泉佐野市）に体験農園「くらし菜園」（約700㎡）を開設した。南海電鉄と地域の農家が提携して、農作業や農業に興味がある人を対象に「夏野菜の女子菜園コース」「夏野菜コース」「週末農園塾コース」の3コースを設定。大阪中心部から1時間以内のアクセスで、気軽に農業にチャレンジできる場を設けた。

コースによっては受け付け間もなく定員を上回る応募があり、南海電鉄では季節や場所に応じたプランを検討し、他のエリアへの拡大を目指しているという。

南海電鉄の総営業キロは154kmに及び、沿線には都心や住宅地、農地、海や山など、さまざまな景色が広がる。それぞれのエリアに息づく歴史や文化、毎日の営み、出会い——それらを掘り起こし、磨いていくことで、沿線に魅力が生まれ、地域の価値が育っていく。

観光客の誘致から将来的な定住までを視野に、南海電鉄は多岐にわたる分野で沿線の魅力創造が続けている。